

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21720100

研究課題名（和文） アメリカにおける創作科と文学批評理論の関係について

研究課題名（英文） A Comparative Study of the American Creative Writing Pedagogy and Literary Theories

## 研究代表者

吉田 恭子（YOSHIDA KYOKO）

慶應義塾大学・文学部・准教授

研究者番号：90338244

研究成果の概要（和文）：本研究の成果はおおむね以下 3 つの領域に分けられる。（1）アメリカ創作科カリキュラムが戦後アメリカ文学にどのような影響を及ぼしたのか歴史的調査および具体的に小説作品を検証することによって得られた成果、（2）創作科カリキュラムの国際化・多文化化に伴う翻訳の重要性に関わる研究および実践、（3）創作科教授法と文学批評理論を実験的文学授業に於いて相互補完的に実践したことによって得られた成果。

研究成果の概要（英文）：The results of this study may be categorized into the following three fields: (1) Researches on the influences of creative writing curriculum on the post-war American literature both in history and in critical studies of particular fiction works; (2) Translation studies and practices based on the internationalization and multi-culturalization of creative writing curricula around the U.S. and the world; (3) Experimental teaching of literature based on the comparative studies of creative writing pedagogy and literary theories.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度	0	0	0
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：文学批評・文学理論・アメリカ文学・クリエイティブ・ライティング

## 1. 研究開始当初の背景

アメリカ全国の大学に展開する Creative Writing Program（以下「創作科」）は今日全米で 300 以上の大学に設置され、作家のみならず、研究者、編集者、さらに多くの創作科教員を産出し続け、一世紀ほどで巨大な文

化・教育システムへと成長した。創作科について個々の作家伝記研究で短く言及されることはあっても、創作科の機構とカリキュラムそのものが、現代アメリカ文学の展開と研究に果たした役回りが本格的に検討されることは、米国内でもほとんどない。第二次世界大戦後の主要な純文学作家のほとんどが

何らかの形で創作科とかかわりをもったことがあること、創作科の有効性についていまなお議論が絶えないこと、そして創作科が米国に独自の芸術教育システムであることを慮れば、創作科の歴史・機構とその思想の研究は、アメリカ文学研究に貢献するところがあると期待された。

## 2. 研究の目的

本研究の目的を、以下、(1) 歴史的研究、(2) 文学批評に関する研究、(3) アメリカ文学と世界文学との関係についての研究の観点からまとめる。

### (1) 歴史的研究

創作科の起源および通史を論じた研究書は非常に少ない。そのなかで D. G. Myers 著、*The Elephants Teach: Creative Writing Since 1880* (Englewood Cliffs: Prentice Hall, 1996) は、豊富な書誌・史料に基づいて歴史を記述するのみならず、創作科の根底をなす教授哲学についても示唆に富んだ学説を提供している。Myer によれば、今日の大学院創作科は、1930 年前後にアイオワ大学で始まった、新人文主義 (New Humanism) 者 Norman Foester 主導の実践的文学教育を起源とするが、その急速な発展には新批評 (New Criticism) の果たした役割が大きい。新批評の精読技術、批評用語が作品合評できわめて有用であったばかりか、歴史的・社会的文脈とは切り離して、文学作品をひとつの自立したテキストとして見なす態度が、建設的な作品批評を目指すワークショップの哲学として受け入れられたからである。この点に関しては、教授経験のある作家の評論、創作科の教科書、また創作ワークショップの運営ルールなどから、今日なお実証的な検証が可能であると考えられた。

### (2) 文学批評に関する研究

新人文主義を生みの親とし、新批評を育ての親として急速に発展した創作科は、60 年代以降、脱構築をはじめとする現代批評理論が台頭するにつれ、芸術作品の自立性を至上の命題としない文学研究への違和感をはっきりと表明するようになってゆく。また、「作者の死」や受容理論が文学を読む前提として受け入れられるようになり、理論的進歩にあたかも背を向けるかのような、実践主義的創作科擁護論者は、保守旧態・反知性主義だと大学内部から批判をうけることとなる。特に創作科批判の言説は幅が広く、慎重な分析を要する。現代批評理論からの見地だけでなく、後期ロマン主義思想の産物である作家天才

論から、現代出版業界批判、フェミニズムやポスト植民地主義の影響で多様化したアメリカ作家の現状を文学衰退の兆候と見るものまで、さまざまである。こういった論争の構図をつまびらかに調査して明らかになるのは、現代アメリカ文学の諸相だけではない。国家や民族共同体のかたちが急速に変化し、伝統的国民文学の概念では現代文学のモデルを示すことが難しい今日、実作者、批評家双方の新たな役割を模索することができるのではないか。

### (3) アメリカ文学と世界文学との関係についての研究

アメリカの創作科は現在世界中から学生を集めている。そのなかには、成人してから英語で書くようになった者も少なくない。また、以前はアメリカに特有であった創作科がほかの国々にも増えてきた。イギリスの Bath Spa University の大規模な創作科大学院、日本の大学に新設されるクリエイティブ・ライティング学科などがその例である。このように、アメリカの創作科では内部の多国籍化、そして外部への展開と二重の国際化が進行している。また、アメリカの大学では、翻訳論研究、翻訳技術養成プログラムが増える傾向にある。そして、文芸翻訳カリキュラムの多くが、創作科内に設置される形で展開している。創作学会では、翻訳に関する研究発表が増えてきた。世界文学と翻訳が不可分の関係にあることから、翻訳をきっかけとした新しい文学の発掘・創造に意識的であるのが、今日のアメリカ文学界であるといえる。創作科がもともときわめてアメリカ的なプログラムであったとするならば、今日英語一極化、グローバル化の波に乗って、その思想が世界の文学の形に影響を与えていることは、批判検証に値すると考えられた。

以上、本研究は、創作科の教授哲学・歴史とその意義をめぐる言説を実証的に検証し、20 世紀初頭から現在に至る文学に与えた影響を、批評理論との関わりにおいて、多角的に検討することを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究をすすめるにあたっては、(1) 資料収集と整理 (2) 実証研究および作家研究 (3) 学会活動と海外の研究者および創作科関係者との協力 (4) 実験授業の実践の方面からアプローチを行った。

### (1) 資料収集と整理

創作科論争・創作科教授法に関する文献、新聞・雑誌記事、書籍、とくに創作の古い教科

書を閲覧・入手し、テーマ等によって整理を行った。2009年秋には、全米ではじめて創作科の設置されたアイオワ大学を訪問し、Paul Engle についての特別コレクション、および国際創作プログラムに所蔵されているアーカイブを閲覧した。また、学生助手の協力を得て創作科に関するすべての資料をデータベース化した。

#### (2) 実証研究および作家研究

現在における基本文献の内容について、一次資料を参考に検証した。また、創作科をめぐる論争については、集めた文献をもとに、分類・分析を行い、論争の構図を明らかにしていった。本研究代表者が今まで研究してきた現代小説家 (Kurt Vonnegut, John Barth, Bharati Mukherjee, J. M. Coetzee) はすべてアメリカの創作科となんらかの関わりを持っていた。このことからわかるように、現代作家を研究する上で、創作科とのつながりは見逃せない。戦後アメリカの小説家の作品が創作科教授理念の理想と現実をどのように反映しているかテキスト研究を行った。

#### (3) 学会活動と海外の研究者および創作科関係者との協力

文学やアメリカ研究についての学会のみならず、創作関係の学会やアメリカ以外の文学も扱う学会など、できるだけ多様な発表先を意識することで、視点の違った発表を心がけ、様々なフィードバックを得られた。

また、ブラウン大学創作科の Forrest Gander 教授、ペロイト大学の Fran Abbate 助教授、などアメリカの創作科で教えている研究者、詩人、作家と連携することで、創作科の現在および教授理念、問題点を参与観察的手法を用いて検証した。

その他の協力体制としては、日本現代詩の英訳という共同作業を実践することで、翻訳と創作の関係についての考察を深めることができた。

#### (4) 実験授業の実践

本研究代表者は文学部で英語教育に携わるとともに、大学設置の教養研究センターおよび外国語教育研究センターで実験授業に協力してきた。今回の研究成果は単に論文として発表されるだけでなく、教養研究センターの協力を得て、書くことと読むことがより有機的に結びつき、学生の自発的「気づき」につながるような、教養文学授業を提案という形でも実践されるべきだと考えている。具体的には、実験的文学テキストを朗読することで、黙読では得られない身体性を帯びた洞察をきっかけに、学生の創作作品執筆をうながし、劇作家・演出家とのワークショップを経て、作品を実験的朗読劇として発表する授

業、およびに、なれない外国語で創作演習をすることで、母語についての言語感覚を新たにする授業というふたつの実験授業を行った。

#### 4. 研究成果

本研究の成果はおおむね以下3つの領域に分けられる。(1) アメリカ創作科カリキュラムが戦後アメリカ文学にどのような影響を及ぼしたのか歴史的調査および具体的に小説作品を検証することによって得られた成果、(2) 創作科カリキュラムの国際化・多文化化に伴う翻訳の重要性に関わる研究および実践、(3) 創作科教授法と文学批評理論を実験的文学授業に於いて相互補完的に実践したことによって得られた成果。

(1) は主に論文や学会発表・講演の形としての成果を生み出した。2009年度から2012年度についての成果は下記の記録を参照していただきたい。たとえば、2010年11月に三田文学会のシンポジウムで外国文学あるいは外国語が日本文学の創作・発展に果たす役割をアメリカ文学研究の成果もとりいれ考察する発表を行った。シンポジウムではフランス現代文学についても同様に書き手の多様化・多文化化が指摘された。今後これらの成果を元に書籍をまとめることが課題となる。

(2) については、実際に大学で創作を教えているアジア太平洋および、米国の詩人・作家・劇作家との意見交換や共同作業の形で成果があらわれた。

まず、本研究代表者の本務地で定期的に詩の朗読会を複数回開催できた。たとえば、2010年10月末には、米国ブラウン大学のフォレスト・ガンダー教授および早稲田大学のフランク・ヴィラン准教授を招聘し、「言語を横断する詩の試み」と題して、詩人野村喜和夫、中保佐和子、永井真理子氏らとともに朗読会と交流会を行った。2011年7月には、「空に書く・水に書く」と題して、北フロリダ大学准教授のクラーク・ランベリー氏を招聘し、インスタレーション、朗読会および講演会を行った。

これらの意見交換、相互交流の結果、日本の実験的現代詩や現代劇を英語に共同翻訳するという新たな「クリエーション」も実現した。たとえば、フォレスト・ガンダー教授との共訳で2011年に出版した野村喜和夫著 *Spectacle & Pigsty* は、2012年に米国ローチェスター大学から2012年最優秀翻訳書賞(詩部門)を受賞した。また、劇作家アンディ・ブレイガン氏との共訳、永井愛著 *Women in a*

*Holy Mess* (『片づけたい女たち』) もまた日本で二カ国語版として出版された。

翻訳作業で得た知見は、アメリカの大学での講演やアジア太平洋創作学会で成果として発表した。

(3) については、主に、慶應義塾大学文学部設置の全学部向け教養授業「文学」におけるふたつの実験授業の実践が主な成果であった。ひとつは、「読書から朗読そして創作へ」と題し、実験的文学テキストを朗読することで、黙読では得られない身体性を帯びた洞察をきっかけに、学生の創作作品執筆をうながし、劇作家・演出家とのワークショップを経て、作品を実験的朗読劇として発表する授業である。この授業は2011年度春学期および2012年度秋学期に実施した。どちらの年度も劇作家・演出家の松田正隆氏を招聘しワークショップを行い、成果は「都市日記慶應日吉キャンパス」というタイトルの朗読パフォーマンスとして発表した。もうひとつの授業は「外国語から始めるクリエイティブ・ライティング」という副題で2011年度秋学期および2012年度春学期に行った。なれない外国語でフリーライティングや定型詩といった創作演習を行い、その過程と成果を学生同士のワークショップで評価することで、母語についての言語感覚を見直し、新たにすることが目標となった。これらの授業における学生創作作品は文集『声と振動』として2012年にまとめられた。

また、2012年度、10月から3月にかけては、オハイオ北大学の舞台芸術専攻との連携も始まった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 吉田恭子 「ワークショップ Inc. —デイヴィッド・フォスター・ウォレス『帝国は進路を西へ』に見る創作科のジレンマ」『ALBION』査読あり、復刊58号(2012. 11.): 34-54.
- ② 吉田恭子 「翻訳跡地まで」『現代詩手帖—ニュートランスレーション—翻訳の詩学』査読なし、10月号、2012: 26-30.
- ③ 吉田恭子 「creative writingと三田文学」『三田文学』査読なし、104号、2011. 206-2014.
- ④ フォレスト・ガンダー著、吉田恭子 訳・解説 「日本のベンヤミン〜翻訳讃」『現代詩手帖』査読なし、2月号、2011. 86-89.
- ⑤ 吉田恭子 “Commuting to Tokyo with Marco Polo: Disorientalism Revisited” *Souk Ukaz: A Market of*

*Ideas* 査読なし、Summer, 2009. オンラインジャーナル.

<<http://iwp.uiowa.edu/projects/SoukUkaz/index.html>>

[学会発表] (計5件)

- ① 吉田恭子 「Translation as Transformation」アジア太平洋創作学会、2012年11月5日、チュラロンコン大学(タイ王国)
- ② 吉田恭子 「On Translation」アジア太平洋創作学会、2011年12月5日、西オーストラリア大学(オーストラリア)
- ③ 吉田恭子 「ワークショップ Inc. —David Foster Wallace の “Westward the Course of Empire Takes Its Way” に見る創作科のジレンマ」京都大学英文学会、2011年11月5日、京都大学文学部(京都市)
- ④ 吉田恭子 「creative writingと三田文学」三田文学会 三田文学創刊百周年記念シンポジウム、2010年11月6日、慶應義塾大学(東京都)
- ⑤ 吉田恭子 「アメリカ現代小説2000年代を振り返る」アメリカ文学会関西支部、2010年10月2日、大阪市立大学(大阪市)

[図書] (計4件)

- ① 永井愛著『片づけたい女たち』東京：而立書房、2013. 吉田恭子 共訳 “Women in a Holy Mess,” 1-105.
- ② 伊藤優子ほか著『現代作家ガイド6 カート・ヴォネガット』東京：彩流社、2012. 吉田恭子 「徹底解剖(しない)！ ヴォネガットの笑い」142-154. 「トウモロコシとブタとライターズ・ワークショップ—アイオワのヴォネガット」155-169.
- ③ 野村喜和夫著 吉田恭子、Forrest Gander 共訳、Spectacle & Pigsty, Richmond: Omnidawn, 2011. 1-128.
- ④ 福岡和子ほか著『悪夢への変貌』京都：松籟社、2010. 吉田恭子 「作家の作家の声—二つの「音声計画」に見る創作科の声の政治学」225-252.

[その他]

ホームページ等

<http://www.kyokoyoshida.net>

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 恭子 (YOSHIDA KYOKO)  
慶應義塾大学・文学部・准教授  
研究者番号：90338244

(2)研究分担者  
なし

(3)連携研究者  
なし